

第 36 回アジア女性会議ー北九州

《エンパワメント！～誰が？どうやって？～》

日時（1回目）2025 年 9 月 17 日（水）13:30-15:30

アジア地域のエンパワメント・リレー

（2回目）9 月 20 日（土）13:30-15:15

日本のエンパワメント・リレー

会場：オンライン視聴（Zoom）

会場視聴（北九州市立男女共同参画センター・ムーブ 5 階）

言語：日本語/英語（同時通訳）

《プログラム》

ページ

<1回目> アジア地域のエンパワメント・リレー

～女性のエンパワメントのため教育や訓練を行う団体紹介～

P1～17

2025年9月17日（水） 13:30-15:30

■オープニング

武内 和久 北九州市長

「北九州市のエンパワメントアクション！」（ビデオ）

■スピーカー

《インド》

マナリ・シャー（SEWA 全国事務局長）

ピナキニ・ソランキ（SEWA 都市労働組合 執行委員）

SEWA、インド自営業女性協会（Self Employed Women's Association）

《フィリピン》

アデライダ・リム（名誉会長）

HABI: The Philippine Textile Council（フィリピン繊維協議会）

<2回目> 日本のエンパワメント・リレー

～それぞれの女性のエンパワメントの達成～

P18～33

2025年9月20日（土） 13:30-15:15

■オープニング

武内 和久 北九州市長

「北九州市のエンパワメントアクション！」（ビデオ）

■スピーカー

山内 千春（盗撮防犯ボランティア Wc 代表）

亀野尾 美紀（築上町男女共同参画ネット（ちく join' ））

＜1回目＞アジア地域のエンパワメント・リレー ～女性のエンパワメントのため教育や訓練を行う団体紹介～

■司会

ただいまより第36回アジア女性会議北九州を開催します。今年は「エンパワメント ～誰が、どうやって～」というテーマで2日間にわたり開催します。

1日目の本日は「アジア地域のエンパワメント・リレー」ということで、女性のエンパワメントのため教育や訓練をおこなう団体として、インドとフィリピンからご登壇いただきます。

インドからは、自営業女性協会（SEWA）より、マナリ・シャー（SEWA 全国事務局長）さんとピナキニ・ソランキ（SEWA 土地労働組合執行委員）さんにご登壇いただいています。

フィリピンからは、フィリピン繊維協議会（HABI）のアデライダ・リム（HABI 名誉会長）さんにご登壇いただきます。

さて今日は「エンパワメント」というテーマですが、皆様は「エンパワメント」という言葉を説明できますか。今日は世界の様々な国からも参加されていますが、皆様の国でも「エンパワメント」という言葉を使いますか。

日本でも「エンパワメント」という言葉を使いますが、知っているようで説明が難しかったり、うまく伝わらなかったりすることがあります。エンパワメントは、すべての人々が必要な力を得るためのプロセスであり、つまり人々、皆様が自分らしく生きて、生活するためには、とても大切なことなのだと思います。

今回はそんな「エンパワメント」に実際に取り組んで行動し、そして実践している団体の女性たちを紹介したいと思います。どんな人が、どんな場所で、どうやって自分らしさを発信しているかというのを、2日間にわたり、登壇者のストーリーを見ることで、「エンパワメント」という言葉をみんなで理解していきましょう。

2日間を通して、このイベントのタイトルである「エンパワメント ～誰が、どうやって～」という問いの答えを、皆さんと一緒に導き出していただければいいなと思います。

今日は皆さまにアジア地域の団体を紹介する前に、まずは北九州市にある私たちのエンパワメント拠点ムーブをご紹介しますが、北九州市は、まさに今、目指すまちのビジョンの中に「女性のエンパワメント」を掲げています。本日は、北九州市の武内和久市長にビデオでご登壇いただき、北九州市の女性活躍の歴史や、エンパワメントの大切さというのをお話しいただきます。それではビデオをご覧ください。

オープニング

武内 和久 北九州市長
「北九州市のエンパワメントアクション！」

会場の皆様、そしてオンラインでご参加の皆様、こんにちは。北九州市長の武内和久です。

本日第36回目を迎えるアジア女性会議北九州が盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。このような意義深い国際会議において、皆様にご挨拶する機会を賜り大変光栄に存じます。

この会議を長年にわたり支え、本日まで導いてくれました公益財団法人アジア女性交流研究フォーラムの皆様、そして女性のエンパワメントというテーマに真正面から向き合ってくださいという国内外の皆様に対し深く感謝の意を表します。

アジア女性会議北九州は 1991 年以来、日本とアジア地域の女性たちが抱える問題をともに考え、相互理解と国際交流を通じて、女性のエンパワメントを促進する国際会議としてその役割を果たしてこられました。



30 年以上の歴史が紡ぎ出すこの会議の意義は、単なる知識の共有にとどまらず、国境を越え、文化を超えて、女性たちが手を取り合い、お互いの可能性を信じ、ともに未来を切り開くための希望の場であり続けていることです。

北九州市にはかつて、女性が社会を動かし未来をつくり出した確かな歴史があります。高度経済成長期の北九州市は、煙突から吐き出される煙で空が灰色に染まり、「七色の煙」とまで揶揄されたほどでした。

そうした環境のもとで始まったのが、女性の皆様による「青空がほしい」運動でした。彼女たちは、みずからの生活を守るため、そして子供たちの未来のために立ち上がり、公害対策を市に強く働きかけました。企業への働きかけ、住民運動、そして署名活動など、粘り強い行動は、社会全体を動かす大きなうねりとなったのです。

女性による公害克服は、まさに当時の女性がみずからの手で未来を切り開き、まちの姿を変えていった歴史そのものです。汚染された環境からの解放を求める切実な声が、行政や企業を動かし、北九州市が環境先進都市へと生まれ変わる礎を築きました。これは、女性が主体的に社会改革を牽引し、困難な課題を乗り越えてきた、まさにエンパワメントを体現した誇るべき市民の物語です。

近年においても北九州市は、女性施策を重要な政策の 1 つに掲げ、様々な取り組みを進めて参りました。女性目線での政策提言を市政に反映させる「ウーマンウィル北九州」の立ち上げや、若者をターゲットとした賑わいの創出など、新たな取り組みが実を結び、昨年 2024 年には 1965 年以降、59 年間続いていた人口の転出超過に終止符を打ち、実に 60 年ぶりに転入超過を達成しました。特に若者や子育て世代の転入が大きく改善したことは、北九州市が、女性が自分らしく輝けるまちとして、その潜在能力を見える化し、反転攻勢へと転じ始めた証といえるでしょう。

その一方、女性が自分らしく輝ける社会を実現するためには、乗り越えるべき課題がまだ多く存在します。かつてある女性から聞いた言葉を、私は今でも鮮明に覚えています。「女性はどの選択をしても、必ず心ない言葉を浴びせられる」と。結婚すれば「なぜ仕事を辞めないのですか」。子供を産めば、「なぜ 1 人だけなのですか」。産まなければ、「なぜ産まないのですか」など、まるで女性には、正解とされる生き方があり、そこから外れることは許されないと言わんばかりの社会の偏見が今もなお存在していると感じました。

私はそのような社会の空気を一掃し、女性が多様な生き方を選択でき、その選択が尊重され、みんなで応援し、支え合う社会を築きたいと強く願っています。

北九州市が目指すのは、「一歩先の価値観を体現するグローバル挑戦都市」です。

これは、過去の公害を乗り越え、環境先進都市として再生した歴史を持つ北九州市だからこそ、掲げられるビジョンです。私たちは、女性のエンパワメントこそが、この一歩先の価値観を体現し、まちの

未来を切り開く原動力であると確信しています。

令和7年度は、市政の重点テーマの1つに、「女性が自分らしく輝けるまち」を掲げ、女性のキャリアやライフの多様性を支える企業への支援や、女性が安心して健康に暮らせるヘルスケアなどに取り組んでいるところです。今後も、女性のリアルな声に社会全体で応え、女性の人生の選択を応援し、支えることで、すべての人の多様な価値観や選択が受け入れられ、尊重されていると実感できるまちをつくって参ります。

重要なのは、これらの取り組みが女性のためだけではないという点です。女性のエンパワメントは社会全体の活性化に直結します。女性が自分らしく輝くまちは、男性にとって、子供たちにとって、そしてすべての市民にとっても居心地のよい、可能性に満ちたまちとなるのです。

今回の「アジア女性会議北九州」の1日目は、インドとフィリピンで「就業」という観点から女性をエンパワーする団体の講話、2日目は、「防犯」や「政治参画」という観点で地域を巻き込む活動を継続していらっしゃる方々の講話をもとに議論を深めると伺っています。登壇される方々のご紹介をさせていただきますと、1日目は、SEWA インド自営業者女性協会 全国事務局長のマネリ・シャー様と、同協会執行委員のピナキニ・ソランキ様。HABI フィリピン繊維協議会 名誉会長のアデライダ・リム様。そして2日目は、北九州市の盗撮防犯ボランティアWC代表の山内千春様。福岡県築上町の「築上町男女共同参画ネットちく Join'」の亀野尾美紀様に、それぞれ発表をいただきます。

この会議が、世界中の女性たち、そしてエンパワメントに関心を持つすべての人々に新たな気づきと行動のきっかけを与える実り多きものとなりますことを心から願っています。結びに、本日まで参加の皆様のご活躍とご健勝を祈念するとともに、本会議が北九州市、アジア、そして世界の明るい未来を切り開くことを願い、私の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

■司会

北九州市の武内市長から「社会の活性化に女性のエンパワメントが不可欠である」というメッセージがありました。市長のメッセージにより、すでに本日の「エンパワメント」というテーマへの理解の助けになったかと思います。

このように、当市がエンパワメントを中心に掲げることをご紹介したわけですが、皆様のお住まいの町ではどんなビジョンがあるのでしょうか？そのまちのプランにはジェンダーの視点や、人々のエンパワメントを大切にしている視点はあるのでしょうか？「行政」といった大きな単位でのエンパワメントの推進について考えました。

本日主催の私たちアジア女性交流・研究フォーラムは、北九州市立男女共同参画センター・ムーブという施設運営も行っています。男女共同参画センターというのは、日本全国の都道府県や市町村が、条例などを制定し、その制定下の取り組みの中で設置している女性およびすべての人々へのセンターのことです。

これら全国各地のセンターが、ジェンダー平等や女性のエンパワメント推進の発信拠点施設であり、ムーブがまさに、北九州市のエンパワメント発信拠点であるということで、今日はムーブ事業課の北間さんにもお越しいただいています。

■北間

皆さん、こんにち。北間です。

■司会

それでは北間さんと一緒に、ムーブという男女共同参画センターがどんなのかを一緒にビデオをみていきましょう。

(ムーブ紹介ビデオ)

■司会

一緒にビデオを見ていただきました。今日は海外からご参加の方もいらっしゃいます。この日本の男女共同参画センターが珍しいと感じる方も、同じような機能を持つ組織はうちの国にもありますという方もいらっしゃるかと思いますが、少し北間さんに、今回のビデオの補足として「ムーブのここがすごいんです」といった特色を教えてください。

■北間

皆様、改めましてこんにちは。北九州市立男女共同参画センター・ムーブ事業課長の北間と申します。先ほどお話にあったように、ここ北九州市立男女共同参画センター・ムーブは、1995年の開所以来、北九州市におけるジェンダー平等、女性のエンパワメントの推進に取り組んでいる施設になります。ジェンダー平等の推進には、女性へのアプローチも必要で重要なものではありませんが、一方で男性側の意識改革も必要なものと考えています。

そうしたことを踏まえムーブでは女性向けの講座はもちろん、男性の家事育児への参画を促進するため、例えば男性を対象にした育児について学ぶ講座や、親などの介護を行うにあたっての知識や基礎知識を学ぶ介護講座など、同じ課題に直面した男性が、参加者同士で一緒に考える講座なども実施しています。

また、ムーブでは、悩みを抱える方向けの相談窓口も開設していますが、窓口は女性向けだけではなく、男性のための相談窓口を設けており、性別を問わず様々な方に寄り添った対応を行っています。そうした事業を通じて私たちは、北九州市のジェンダー平等、女性のエンパワメントの推進に取り組んでいます。

■司会

北間さん、どうもありがとうございました。ムーブはまさにエンパワメントの発信拠点であり、女性の視点だけでなく、人々が一緒に暮らしていく中で男性もいろんなことに参画していくことをサポートするなど、人々が手をつなぐような活動をしているというところは素晴らしいと思いました。北間さん、今日はありがとうございました。

皆さんのお住いのまちでもこうした男女共同参画センターとか、エンパワメントにまつわる取り組みがあればいいなと思いますし、面白いエピソードがあればコメントをください。

インド

マナリ・シャー（全国事務局長）
SEWA、インド自営業女性協会

■司会

それではお待たせいたしました。インドからお招きした SEWA のマナリ・シャーさんとピナキニ・ソランキさんをご紹介します。お二人にご登壇いただく前に、SEWA という労働組合組織の紹介ビデオを見ていただこうと思います。

（SEWA 紹介ビデオ）

■司会

ビデオを見てご講演いただく内容の理解につながればと思います。まずはマナリ・シャー様にプレゼンいただき、続いてピナキニ・ソランキ様にお話しいただきます。

■マナリ

皆様、こんにちは。この会議でお話できることを大変嬉しく思っています。

28 年前に私どもの創設者(エラ・バット)がこの壇上に立ちました。SEWA が始まったのは 1972 年です。今やインドの 18 州にわたり、320 万人の女性を組織化するまでに拡大しました。当然のことながらこの道のりには苦労も伴いましたが、大きな成果も遂げてきました。本日はその内容についてお話をさせていただきます。

さて、SEWA インド自営業女性協会は、インド全国規模にして最大の協会です。非公式な女性労働者を組織化しております。労働の種類は大きく 4 つに分けられます。路上販売業者、在宅労働者、労働力サービス提供者、そして生産者です。



インドの非公式経済は非常に大きく、全体の労働力 4 億 8700 万人のうち、93.7%が非公式な労働力なのです。つまり公式な労働力はわずか 6.3%にすぎないということです。この非公式経済はインドの様々な経済に寄与し、GDP への貢献度は 62%であり国民の貯蓄の 50%を占めます。さらに国の輸出の 39%を占めているのです。そうした意味で労働力が公式か非公式か、または男性か女性かといった性別にかかわらず、平等・公平というものが経済を押し上げる上で何よりも重要であると考えています。

SEWA は創設以来「闘争と開発」というアプローチを続けてまいりました。非公式な労働者たちを組織化し、そして協同組合や企業を通じた集団化も行ってきました。また持続可能な価値や機会を提供し、安全な社会保障も提供してきました。SEWA の最終的な目標は「完全な雇用と自助」です。各個人が意義ある生活を送れるように支援するのが、SEWA の使命です。それぞれの家族の中で、あるいは社会の中で、個々が存在意義を得るということはとても重要です。

さて、創設者エラ・バットの言葉ですが、「エンパワメントは受動的なものではない。むしろ、行動と動きを必要とする能動的なものである」と彼女は言っています。まさに、この言葉の通りです。

ここで、露店販売業者の例をお話させてください。インドにおいて彼女たちは歴史的に脇役として扱われていました。しかし SEWA は自然に生まれる市場を合法化しようという取り組みを行いました。10 年以上の闘争を重ねた結果「路上販売業者法」が成立しました。政府や自治体当局、政治家と交渉を重ね、この SEWA 法案を成立させました。そのために、議会の建物の前でハンガーストライキも行いました。そして、会期の最終日に、ようやくこの路上販売者法案が通過しました。これによって、集団の力というものが実証されたと思います。厳密には 48 年間かけて、ようやく実現しました。

私たちの経験から、集団として声を上げることにより様々な課題を克服できると考えています。この集団が可能になるのは、組合が結成されているからです。女性はエンパワメントされ、自信を持ち、力を持ち、そして権利を主張することにつながっています。もちろん個人としても、あるいは集団としても権利を主張します。

結実するには時間がかかりますが、例えば、個人が自分の名前を主張し、出身地、そして仕事について語る。そうすることで女性であっても、自己を一人の人間として位置付け、自らの存在を自覚することにつながっていきます。そして、一人ではないということを、一人一人の女性が認識するわけです。他にも同じような経験をし、あるいは困難を克服してきた女性たちがいるのです。

声をあげることで「自分の人生は自分でコントロールする」という第一歩になります。私たちの創設者は、「エンパワメントは自信を育む過程であり、自己の尊厳意識、一体感、そして団結を通じて実現させる」と言っていました。これらが脆弱性を乗り越え、貧困者の助けとなる、ということでもあります。

一人ひとりが仕事をしている人間としてのアイデンティティが必要です。そして、そういった存在がいることによって、家族、そして地域社会にも大きな影響を及ぼすことができます。

さて、SEWA 初期の取り組みとして、ヘッドローダー（頭上にものを載せて運ぶ労働者）やカートの引手たちが認知を得るための活動がありました。一人の働き手が 7~10 店舗をかけ持ち、大量の荷物を一つの店から別の店へと運ぶ必要がありました。これは卸売市場での話です。この状況では従業員と雇用主の関係性を立証するのがとても難しかったです。なぜなら、店舗オーナーである雇用主は、この従業員に対して責任を持ちたがらず、社会保障は自分の責任ではないという姿勢を取っていたからです。

私たちは、こうした雇用主や労働局と交渉し、集団でのデモンストレーション活動も行い、従業員に対し社会保障をきちんと提供するよう主張しました。その結果、雇用主は、社会保障への責任を認め、彼らは正式な労働者であるという認定を受けて、ID を作成することにもつながりました。雇用主は書面で、従業員に対して社会保障を提供することを確約しました。

現在では、何かあれば雇用主協会と SEWA が定期的に賃金交渉をするといった形での交渉が可能になっています。またヘッドローダーたちは、平等な賃金上昇への合意も取り付けました。これらは、脆弱な働き手であった女性たちが権利を主張して立ち上がった結果です。

低所得の女性たちを組合化、組織化するには、包括的で統合型のアプローチが必要になります。職業

訓練やリーダーシップの能力開発などを提供する必要があり、また栄養、チャイルドケア、あるいはヘルスケアといった手当も必要です。そうすることで彼女たちは常に栄養やヘルスケアを受けることができます。この統合型のアプローチにより集団の力や交渉力が実証できたと感じています。

自らの自信から声を上げるということは、経済的な独立性も示します。これは大変重要な意味を持ちます。各地の州政府、そして市民会議の前で立ち上がり、どのような会議を前にしても声を大にして話すことができるようになったのです。これらは家族やコミュニティの中で尊厳を持ち、そして社会全体として尊厳を持つことにつながります。

SEWA で私が学び始めたとき、大変力を与えられたと思いました。そしてこの力が忍耐強く、他者に理解を示し、さらには大変謙虚に取り組むことができるわけです。

エンパワメントというのは重要な言葉ですが、正しい方向性をもって使われなければいけません。力や権限を持つということは、正しい形でこの権限を執行しなければいけないということも意味しています。その中で我々はエンパワメントを、今も継続して働きかけています。

最初は小さくてもこれを拡大し、成長させ、そして強く、大きな動きにしていきます。エラ・バットが言っていたように「指が拳になるまでには時間がかかる。拳がより強く大きくなるまでにはもっと時間がかかる」のです。

第二部ですが、エンパワメントについて私の同僚であるピナキニ・ソランキの方から話をしたいと思います。これは各地の廃棄物処理場における廃棄物リサイクル業者への支援であり、先ほどビデオでご覧いただいた内容についてご紹介させていただきます。私からは以上です。ご清聴ありがとうございました。

インド

ピナキニ・ソランキ （都市労働組合 執行委員）
SEWA、インド自営業女性協会

■ピナキニ

皆様、こんにちは。私は廃棄物リサイクル業者と SEWA についてお話したいと思います。ヒンディー語で話すので、もう一人通訳を挟むことになります。

ピナキニ・ソランキと申します。私は自営業で廃棄物リサイクル業を営んでいます。SEWA との関わりですが、私の母も廃棄物リサイクル業に携わっており、SEWA の中で大きな力を得ました。私は 26 万 2 千人の廃棄物リサイクル業者を代表して、特に社会保障、所得保障、そして労働における安全保障についてお話をしたいと思います。



インドでは年間 6200 万トンの廃棄物が発生し、そのうち回収されるのは 4300 万トンにすぎません。その他は未処理のまま放置されるか、埋め立て地に廃棄されます。回収された廃棄物のうち、きち

んと分別されているのはわずか 30%です。希少なアルミやプラスチックなどの資源は失われリサイクルされていません。このリサイクル業は、全人口の 1%から 2%によって行われ、大変限られた人々によって担われています。廃棄物リサイクル業に関わっているのは、大部分が女性労働者です。彼女らは様々なプラスチック、紙、金属、ゴム、ガラス、木材、さらには人間の髪の毛までも収集しています。家庭や道端など様々な場所から廃棄物を収集しています。

彼女たちの仕事は、1 日 10 時間以上の長時間労働を強いられます。自分の時間は全くありません。また膨大な重量の廃棄物を頭の上に掛けて運ぶため、長期的な頭痛や体の様々な痛みに苦しめられることとなります。それらに対する 1 日の収入が 2 ドル以下ということもあります。

この女性たちには、きちんとした社会保障や安定した収入はありません。複雑で長く搾取されるサプライチェーンの中で、多くの仲介業者によって安価に働かされることを余儀なくされ、彼女たちの所得が大幅に減ってしまいます。そして、買い取り業者（貿易関連の人たち）は計量により対価を払うわけですが、公平な計量措置でなく不公平な価格を強いられることもあります。

働く場所は衛生環境が整っておらず、蚊に刺されたり、指を汚したり、様々な有害な環境の中で働かざるを得ません。未成年の労働者も大きな問題です。それぞれの埋め立て地における脆弱性が連鎖し、伝統的な廃棄物リサイクルの環境は改善されていません。

こうした多くの課題の中で、私たちはリサイクルセンターを展開することになりました。そこで、独自の「価値創造センター」(Value Creation Center)を設立し、回収された廃棄物の分類、そして紙、プラスチックといった希少性のあるリサイクル可能なものを活用しています。回収した大きな廃棄物それぞれをどううまく活用できるか検討します。

これは、大きな所得の安定や集団交渉ができることによる労働環境の改善につながりました。

このような回収の形は、リサイクル業者の方々がスケジュールやタイミングなどを自分で決めることができます。その中には、モバイル回収といったシステムもあります。SEWA では、公平な価格が得られるよう集団交渉を通じて、都市の中に廃棄物が回収される場所を設定し、その「価値創造センター」を経由することで、ゴミの分類などが効率的にできます。

また女性たちをエンパワメントするために、SEWA のリーダーがこの「価値創造センター」の活動を市長や市の担当者に訴えるといった働きかけも行っています。会議により、現在では 5000 以上の世帯から収集した廃棄物については埋め立て処理や、そして使えるものは「価値創造センター」に搬入されています。

さらに MRF（マテリアル・リカバリー・ファシリティ）という施設で、これらを回収しています。リサイクル業者のメンバーは、二つの資源回収施設からリサイクル可能な廃棄物を分別し「価値創造センター」に搬入します。周辺地域においてリサイクルできる廃棄物を、こちらのセンターの方に回収して、処理していくというやり方をとっています。

SEWA は適切なテクノロジーを使うことも鍵だと考えています。それによって所得が高まるという考えのもと、このテクノロジーを採用し、バリューチェーンを活用することによって、廃棄物リサイクル

業者も病院から収集し、リサイクルすることが可能になっています。

ベルトコンベアやそれ以外の機械などもバリューチェーンに導入されていますので、生産性がアップし、効果的なゴミの分別もできます。さらに主要なリサイクルセクターとの交渉力も持っています。資源を集める量も増え、適切に分別・輸送することで市場からの需要に応えることが可能になっています。

それからコンピューターや金融の知識を身につけることによって、個人の生計にも役立っています。バリューチェーンは、リサイクル業者のエンパワメントを評価する役割も担っています。チームワーク、創造力、そして、自分事として各個人が仕事をできるようになっています。

「エンパワメントは継続的なプロセス」です。強くなるためには拳にして、さらにそれを大きくしていかなければなりません。ありがとうございました。

フィリピン

アデライダ・リム（名誉会長）

HABI: The Philippine Textile Council（フィリピン繊維協議会）

■司会

ありがとうございました。続きまして、フィリピンの組織「HABI」、フィリピン繊維協議会のご紹介です。フィリピンにはたくさんの島々があり、それぞれの土地には、かつて伝統的な繊維や織物がありました。そんな素敵な織物を、私たちにも日常的に取り入れられるよう商品化し、女性の方々と共に活動している団体をご紹介します。今回もアデライダ・リム様のご講演の前に、HABI の紹介ビデオを皆様に見ていただきます。

（HABI 紹介ビデオ）

■アデライダ

皆様、こんにちは。今日はフィリピンからアクセスしていますアデライダ・リムです。

HABI、フィリピン織物協議会の創設メンバーの一人です。HABI は非政府組織で、伝統的な織物の保存と現代社会への普及に取り組んでいます。HABI はもともと、ASEAN 伝統織物協会から、地域内に評議会を招集したいという提案を受けて設立されました。それまでフィリピンには織物評議会がありませんでした。また、素晴らしい織物の伝統があったにもかかわらず、その認識は一切ありませんでした。



インドネシアやタイのような東南アジア諸国では、織物評議会が積極的に伝統織物の保存と振興に取り組んでいました。両国は、織り技術の改良や、優れた職人による商業化も進んでおり、私たちは多くを学ぶ必要がありました。

HABI のミッションとしては、女性たちが母から受け継いだものを作り続け、その技術をさらに次世代に伝えるよう奨励することです。同時に、デザイナーや購入者、つまり直接のユーザーたちにも、こ

のファッションや生活雑貨で、伝統の織物を使ってもらうよう促しています。

私たちがこの組織を立ち上げて最初に気づいたのは、この手仕事による織りの技術が、消滅しつつあるということでした。何もしなければ、完全に失われてしまう。伝統織物への関心は、例えば公式行事など特別な場での民族衣装としての使用に限られていました。織り職人の方々は高齢化が進み、若い世代は、学ぼうという関心を持っていませんでした。

若者にとって織物は、生活の手段として魅力的ではなく「携帯さえあれば十分」という感じでした。また両親たちは子供が医学や法律、コンピュータープログラミングなどの専門職に就くことを望んでいます。

織りは尊敬される仕事ではなく、経済的にも成り立たないと見られていました。織り手はほとんど女性ですが、作品を市場に届けるのに苦労していました。

女性たちは内気な性格で、注文が来るのを待つことしかしません。しかも多くの織り手は遠隔地の農村部に住み、購入者はめったにやって来ません。

そこで、私どもは「HABI マーケットフェア」の開催、あるいは「織物大会」の実施、そして「織りのワークショップ」や「映像ドキュメンタリーの制作」などを行いました。

まず「HABI マーケットフェア」ですが、これは年 1 回開催しています。フィリピン各地から織り手や販売者をマニラに集め、展示販売しています。過去 15 年間、毎年欠かさず開催しています。多くの購入者を引きつけ、毎年安定した売り上げが出ています。協議会は 3 日間、出展者に対し手ごろな価格でブースを貸し出しています。売り上げの一部を運営費として受け取り、他のプログラム（例えば大会、ワークショップ、コンテスト、出版活動など）の持続可能性を確保しています。

当初は、参加者はほんの一握りしかおらず、私たちはほとんど強制的に「出てください」と織り手をお願いしていました。マニラに行くのにはお金もかかりますしリスクもあります。しかし、第 1 回目は成功を収めました。参加者たちは売り上げを手にし、買い手とコンタクトを取り、買い手とその好みを共有し、作り手は新しい作品を作ろうと考えました。

今は「HABI マーケットフェア」への参加を強制する必要はありません。織り手たちは毎年自ら準備をしています。もともとはテキスタイルベンダー、つまり個人商店で 15 ブースから始まったのですが、現在では 100 ブースを展開しています。展示されるものは非常に多様で、手作業によって、ほとんどが女性の起業家によって作られています。

例えば、パイナップル織りの名人であるラケル・エリセリオさんがいます。彼女は最初のフェアに参加するよう強く勧められ渋々参加しましたが、今やマニラの高級デパートにブティックを持つまでに成長しました。「HABI がなければ今の私はない」と彼女は言っています。彼女のブランドは、今や革新的なデザインと品質で知られるようになりました。彼女のように「HABI マーケットフェア」をきっかけに、市場の声に触れ作品の価値が認識され、参加者は市場の需要に応えています。

ビデオにて紹介していますが、これはパイナップルの繊維を使っています。このように繊維を引き抜き、女性が繊維を織り機にかけられるように裂いているのです。

パイナップルの製品には、乾かす工程があります。このように吊るして乾燥させます。大変細い糸になりますので、慎重に扱わなければいけません。繊維が切れないように慎重な手作業が必要となります。

上部の針にかけることにより繊維のヘッダーの部分になります。やっとこれで織り機にかけることができるようになるわけです。

つづいて「織物大会」についてですが HABI では二つの大会があります。「ルーデス・モンテリーバ織物大会」と「ロライサ・ゴメス・アバカ織物大会」です。これらの大会はインスピレーションの源となっています。毎年、より磨かれた技術のものが提示され、こういったものが期待されるかが明確になっています。

忘れ去られたような伝統的な技法が改めてイノベーションをもって生まれ変わっています。このフェアでは賞金も渡されます。多くの購入者が割安に購入しますが、本来であれば博物館などに展示されていていいような高品質の品ばかりです。

「ルーデス・モンテリーバ織物大会」を開催した際には、成功するのか確信を持てませんでした。この取組も最初から困難にぶつかりました。コンテストで受賞された方は「Pinya」という本の作者でもあります。この Pinya は、パイナップルを素材としたパイナップル織りのことです。この方は売上金を寄付することにより、この Pinya というパイナップル織りの職人たちを支援しました。

当初、熟練工はごく少数で、応募作品にはあまりバラエティがなく、オリジナリティや独創性に欠け、品質もばらつきがあるという問題がありました。しかし、驚いたことに多くの応募がありました。年を重ねるごとに、新しい織りの技術が導入され、独創力や技術も磨かれたものになっていきました。この大会は本当に創造性を刺激するものへと成長していきました。

この結果を見て、アンソニー・トレハス・リムさんが、若い織り手に参加を促すために、大きな賞を設けました。30 歳以下の若い織り手のための特別賞です。なぜこのような賞を設けたかという、ほとんどの織り手は高齢化が進んでいたからです。驚いたことに若い織り手は存在しました。この写真に写っている方は、素晴らしい技術を持った若い織り手です。この受賞した女性は 12 歳の少女で 8 歳のときから織り始めたということで、すでに数年の経験を積み、このような賞を受賞しました。これは私たちにとって大変素晴らしい未来です。パイナップルの繊維を使ったパイナップル織りは、今後の次の世代にも継承されるでしょう。

もう一つの大会は、「ロライサ・ゴメス・アバカ織り大会」です。これはゴメス家という具体的には HABI の活動を主導したファッションデザイナーである息子トーマス・マーティンが作ったものです。トーマス・マーティンは協会ですえりような制服に活用するため、この賞を設けました。

当初は応募数が少なかったものの、技術的には多様なものが寄せられました。年を重ねるごとに多くの人たちがこの大会に参加するようになり、アバカ織りが花開きました。伝統が止まりかけていたこのアバカ織りへの関心を高めるという夢も実現したのです。

「織りのワークショップ」が様々な国で開催されています。ここでは女性がどのように紡績を行い、繊維をどう扱うかということ学びます。このワークショップは、西部の科学技術部門の支援を受けています。織り機の品質、素材、また技術支援などが提供されています。HABI が女性たちに学ぶ機会を与えるというのは、非常に有効なエンパワメントの戦略であると考えています。

女性たちは新しい形で、家計を支える手立てを得ることができます。女性は新しい知識を学ぶことに貪欲です。HABI のワークショップでは、「織りを習得することができれば、家計を助けることができる」ことを強調しています。女性が技術を身につけることにより自信を身につけることができます。生活も

より良くなります。自分たちの立ち振る舞いや身なりも変わってきます。女性の収入は家計の糧となり、それによって子供たちは大学に通えるようになります。

ワークショップでは、このような経済的なリターンを得ることができ「新しいことを学ぶことは経済的な豊かさにもつながる」ということを示します。労働に対する公平な報酬という概念も知ってもらうことができます。学び続けるというモチベーションにもなり、また、活動の持続可能性にもつながっています。

「ルンガン・ガサード財団」というのがあり、これはパラワンにあるものですが、こちらはもう一つの女性のエンパワメントに通ずる事例です。ルンガンというのは、パラワンの言葉で、「女性たちが共に働く場」という意味です。また、ガサードとは、「命の源泉」を意味します。ここでは女性たちが協力して働くことができます。

女性は、織るという行為、繊維の扱い、そしてその仕上げ、そして服づくりに至るまで、すべての工程を学ぶことができます。これはすべて循環型の形のなかで作っていくことになります。それにより働く女性は、安定した収入を得ることができ、生活も安定します。この島には、本来織物の伝統がありませんでしたが、必要なパイナップルの繊維がふんだんに収穫できることが分かったので、この島に自生していた植物を資源として活用しています。

もう一つの島、カタンドゥアネス島では、アバカ復活プロジェクトがあります。このアバカは十分に活用されておらず、価値が生み出されていませんでした。ほとんどは廃棄されるか、島から低価格で輸出されていました。実はアバカ織りは補強織物として織られているという古い伝統がありました。このアバカ織りは雨風に強く織られたもので、自然環境に適しています。HABI は、この伝統織物の復活を使命の一つとして掲げこの織りセンターをカタンドゥアネス島に設立し地域の支援も得ることができました。材料として輸出されるだけだったアバカが、世界各国や代替地域にも広く普及することによって、その価値が改めて認められることになりました。最近アバカが、フィリピンや日本の様々な紙にも使われるようになっていきます。そしてこの織りセンターを中心とした仕組みは、地方のコミュニティーからも支援を受け、女性が基礎的なワークショップに参画し、工芸や伝統的な織物をさらに普及させることにつながりました。

実は過去の技術自体は失われかけていました。しかしアバカ産業は発展することができました。伝統的な織物が復活しています。（写真で紹介している）この繊維は、誇りや多様性ととともに、綿花やパイナップルなどを織り込んでいます。このように様々なバリエーションがありますが、これらがフィリピンで作られているということが重要なのです。この繊維によって、それぞれのアイデンティティが確立しているのです。

職人の一人一人が、喜びを持って満足することでエンパワーされた女性たちになるわけです。そして各地域のリーダーたちは、その文化の持続可能性に対しても貢献しています。フィリピンには複数の島々があり、それぞれの民族がいて言語も違います。食べ物も服装も違います。異なった音楽に合わせて、異なった踊り方をします。そういった違いがそれぞれありますが、フィリピン人としてのアイデンティティという意味では共通したものがあります。

織り手もそうです。地域によって織り方も、使う道具も、仕上がる見た目も違います。また、専門技術も様々です。そんな多様な技術がありながら、統一性もあります。

繊維は、パイナップルが代表的なものですが、綿や、南部ではアバカがあります。こうした繊維は、

民族衣装や日常の服装にも使われています。

以上のように多様性はありますが、共通項は「織る」ということです。その中で女性のエンパワメントがあります。私たち人類の歴史を振り返ってみますと、たくさんの戦いがありました。これは変えなければなりません。女性が自らの人生を変えることができ、エンパワメントを持てば、世の中も変わるでしょう。ありがとうございました。

質疑応答

■司会

アデライダ・リムさんありがとうございました。素敵な織物風景のスライドとともにご紹介いただきました。それではこれより質疑応答の時間に移らせていただきます。

まずは最初に SEWA のお二方に質問です。マナリさんは長く続く団体の中でリーダーとしてご登壇いただけてます。組織が長く続く中で若者へのバトンタッチがどうしてうまくいったのでしょうか。また同じ次世代へのバトンを渡すことへの課題を世界の団体も抱えていると思いますので、そうした中で課題などがあれば教えてください。

■マナリ

ご質問ありがとうございます。私たちの組織には多くのリーダーがいます。後継者として次のリーダーシップを担える方々も多くいます。1 人や 2 人にフォーカスするのではなく、5 人や 10 人の中から、立ち上がってくれる方々にバトンを出したいと常々考えております。

私もそういったプロセスから立ち上がった一人であり、自ら体験しています。そして、なるべく仕事を分散化しその働きぶりを見て責任者を選んでいきます。

SEWA は労働組合を組織しているので、草の根運動をしてきてきたようなリーダーの方もいます。常に心がけてみているのは、一人ひとり労働者であり、ビジネスへのプロフェッショナルな知識を持つことも重要と考えているので、そういった若者と一緒に SEWA を導いていただきたいと考えております。

■司会

マナリ・シャーさんどうもありがとうございました。私たちにとっても非常に示唆的なコメントが含まれていました。ピナキニさんはいかがでしょう。

■ピナキニ

私が受けた SEWA のトレーニングは組合としてのトレーニングでした。OJT という形で、上の役職の人たちが効果的に指導してくれました。SEWA で学んだことは、自分が労働者であり、女性として同じような課題を抱えている人がたくさんそこにいるということ。そして、私はそんな人たちを代表として声を上げなければいけないリーダーとしての役割を確立できたことでした。

私は市長や政府官僚、それに大臣の前であったとしても、私の上司が教えてくれたように、自分の意

見を言えるようになりました。また、働く側の気持ちに共感しながら発信していくということが重要だということを知りました。

私は家から出たことがほとんどありませんでした。世界がいかに大きいのか、そして世界の中で私はどういう立ち位置にあるのか知りませんでした。廃棄物を回収してトレーダーの仲介者と話をするだけで、公平な取り扱いを受けているのかも私にはわかりませんでした。それは私が教育を受けていないことが問題だったのだと思います。

そんな中で多くを学ぶことができました。廃棄物の回収業の重要性を知り、様々な政府高官の方たちと話をすることができました。これまでの私が与えられていた状況はとても限られていたことを知りました。そしてリーダーになることで、上の人たちからいろんなことを学ぶことができたことが大きかったと思います。ありがとうございます。

■司会

未だに残っている課題はあるかと思いますが、ピナキニさんが経済的に自立していくことで家族はどのような影響を受けましたか。

■ピナキニ

いろんな課題が残っています。「価値創造センター」ができたものの廃棄物回収者には、需要といった市場の状況がよくわかっていません。どの廃棄物をリサイクルする必要があるのかといったことを理解することが次の課題だと思います。

一方で集団として交渉ができるという協同組合の存在があり、それが大きく私達の立場を変えました。今までは実際に回収したものが、その先にどうなるのか見えていませんでした。トレーダーという仲介業者は、適当な理由をつけて低い価格を提示してきていました。しかし、今は仲介業者との交渉もできます。保障についてもそうで、今では1年に1回交渉する権利も与えられました。

「価値創造センター」の設立によって女性だけではなくその家族全員がこの恩恵を受けました。子供たちに教育を与えることができ、さらに女性たちは家族の中で発言をすることもできるようになりました。社会的な実行力がとても上がったと思います。

女性は1年に1回ボーナスをもらいます。それを使って住居や家計の管理もでき、自分が欲しいものや、家族にとって必要なものを買うことができます。以前は自分の給与を誰が決めているのかわからない、あるいはどうやって交渉すればいいのかわかりませんでした。

しかし SEWA の教育を受けて計算の仕方もわかりましたし、正しく明確な数字であるかも自分で確認できるようになりました。私のようなリサイクル業者に、ぜひもっと参加していただきたいと思いますし、収入も担保され世帯の収入にも寄与できるようになると思います。

そして次世代のためにも、教育は重要であるということを強調したいと思います。私は卒業し、今は子供たちを教育しています。娘は医師になりたいと言っています。息子も科学の分野で12年生を終了し高校を卒業しています。以前はあまり教育の重要性というものは語られておりませんでした。しかし、教育は確実に必要で人生を大きく左右します。私は夫と同居しておらず1人で家族を見ています。このような家族の変化をみて、自分は SEWA にエンパワーされたのだと実感しています。本当に私のような他のリサイクル業者の方もエンパワーされて、家族を養えるような存在になって欲しいと考えます。

■司会

ピナキニさんありがとうございました。続いてはフィリピンの、アデライダ・リムさんへの質問です。アデライダさんも HABI の創設メンバーとして長年活動していますが、とても美しい織物の成功の陰に何か抱えている課題はありますか。それからいろんな賞や展示会の開催についての資金は政府からもお金は出ているのでしょうか。

■アデライダ

政府からの支援は主に開催しているワークショップについて受けています。専門家がワークショップを開催してくれるので、女性たちが学んでいます。さらに、糸の開発についても、例えば綿花の栽培や、或いは地域で生息する植物栽培にも政府は力を入れようとしています。生糸がとても重要なので、私たち自身が独自で栽培をし、この業界への発展に寄与できればと思います。

■司会

今フィリピンで若い織り手、例えばティーンエイジャーや 20 代前半などは、どれくらい織物を作ることに興味を持っていますか。また機織がどのくらい収入の糧になるのでしょうか。

(アデライダ)

コンテストを開催し始めたときに、若手のエントリーが多かったことで学びたい若者がたくさんいるんだなと気づきました。そういったチャンスを提供することが重要である一方で「あなたたちは価値があることをやってるんですよ」と教えることも同様に重要でした。

パンデミックで在宅を余儀なくされているときにも、若者の存在に目が行きました。機織は家にいなくても仕事ができますし作品をつくり出すこともできる。どこかに雇用されてオフィスに行くのではなく、自宅で始められるのだということに気がついたのです。

■司会者

ありがとうございました。最後に男性から頂いた質問です。我々男性が女性のエンパワメントを直接支援し、助けるためには何をすればいいですか、ということでした。職場であったり家庭であったり地域社会、そしてグローバルレベル、あるいは個人レベルでのアドバイスやコメントをそれぞれから一言ずつください。

■マナリ

違いはないです。男性であれ女性であれ、誰かをエンパワメントするということに何も変わりはありません。これは一連のプロセスですので、男性だって女性だってできるんです。どちらでも構わないんです。重要なポイントとしては「自ら協力をしたい」という意思があるかどうかであります。実際活動や動き始めてみると、いかにエンパワメントされた個人が成長していくのを目の当たりにします。本当に手に取るようにわかるのです。

これは 1 つの過程であり継続的な過程に過ぎません。ですので特に男性だからあるいは女性だからでできることではなく誰にでもできることなのです。

■司会

マナリさん、すてきな回答ありがとうございます。続きましてピナキニさんお願いします。

■ピナキニ

女性だけの役割ではなく男性もやはり、やらなければいけないし女性はスタート地点がずっとずっと後ろにあります。ですから、女性の肩を押してあげなければいけない。男性が肩をたたいて教育を与えなければいけないと思います。誰もがともに本来のあるべき才能や力を発揮できるようにしていくべきだと思います。

■マナリ

つけ足しになりますが、SEWA ではすべて女性のリーダーシップのもとに動いています。しかし残念ながら以前は女性が前に出て何かをするということが許されない環境が組合内にもありました。一度労働組合内を男女で分けようという話になりました。女性の立ち位置としては捨てられたと言ってもいいと思います。ただ私はそれでよかったと思っています。というのもそこから自らが立ち上がって成長することができたからです。女性のリーダーシップが可能になったことは大きかったと思います。

18 の州で 320 万人の女性のメンバーによってこの組織は回っています。ただ取り組みの中で男性が私たちにアドバイスを求めにくる場合もあります。その場合もちろん女性と同じように対応します。

リーダーミーティングというものがあり、なかなか声をあげて話せない状況にありましたが、今はミーティングの後に男女で一緒に討議をすることができています。この時間は学びが多かったと思います。

■司会

どうもありがとうございました。それではピナキニさんから男性と一緒にやっていくことについて何かありますか。

■ピナキニ

私にとって重要なのは男性が私の仕事を重視してくれるということ、私の仕事に敬意を払ってくれるということです。私は廃棄物リサイクルとして環境に寄与していると思っています。そのことを鑑みてきちんと評価して欲しいというのが私の願いです。

■司会

皆さまどうもありがとうございました。別のセミナーを開いてもっと深いディスカッションしてもよいくらいの内容でした。

今日のテーマ「エンパワメント～誰が？どうやって？～」っていうことに対して、皆さんはどのような気づきやエンパワメントのやり方やその大切さがわかったりしましたでしょうか。参加された皆さんが今日感じたことや聞いたこと、考えたこと、お話しの中で素敵に思ったことなどをぜひ周りの皆さんと一緒に話してください。そして今日聞いた話を次につなげていただければと思います。

今日は SEWA や HABI のような大きな団体による女性へのエンパワメントを紹介しました。私たちのエンパワメントに関する理解を深めるセミナーはまだ続きます。次回は一人一人の女性がどうやってエンパワーして、どうやって地域の中でその活動を広げていったのか、というようなストーリーについ

てのお話になります。皆さまありがとうございました。

1回目 終わり

<2 回目>日本のエンパワメント・リレー ～それぞれの女性のエンパワメントの達成～

■司会

第 36 回アジア女性会議北九州を開催いたします。今年のテーマは「エンパワメント ～誰が、どうやって～」ということで 2 日間にわたり開催しており、本日はその 2 日目です。

本日は日本のエンパワメント・リレーとして「それぞれの女性によるエンパワメントの達成」というテーマでお届けします。それぞれの女性が達成する過程、すなわち一人ひとりの皆様がどのようにエンパワメントを遂げたのか、あるいはされてきたのかということに焦点を当ててお届けします。

2 日目となる本日は、北九州市からは山内千春さん。築上町からは亀野尾美紀さんです。

ご講演いただく前に「目指すまちのビジョン」の中に「女性のエンパワメント」を掲げている北九州市の武内和久市長にビデオでご登壇いただき、北九州市の女性活躍の歴史やエンパワメントの重要性についてお話しいたします。

オープニング

武内 和久 北九州市長
「北九州市のエンパワメントアクション！」

* ビデオ動画による登壇で、1 回目と同内容であり省略。

■司会

ありがとうございます。ビデオをご覧いただきましたが「女性が輝くまちは男性にとっても、子供たちにとっても、すべての人にとって居心地がいい町でありそれは可能性に満ちた町である」という武内市長の言葉でした。本日ご登壇のお二方のエンパワメントストーリーは、そういった視点の中で、何を変えていくのかということにも注目してご覧いただければと思います。

続いて、アジア女性交流・研究フォーラムが運営している北九州市立男女共同参画センター・ムーブをご紹介します。日本の男女共同参画センターは全国の都道府県や市町村などに条例等に基づいて設置されており、主に女性や男女共同参画をメインとした活動活動です。

ムーブはまさにこの北九州市のエンパワメントの実行と発信の拠点であり、本日はご紹介いただくためムーブ事業課の北間さんにお越しいただいています。北間さん、こんにちは。

まずは男女共同参画センター・ムーブが何をしているか、ビデオでご覧いただきましょう。

(ムーブ紹介ビデオ)

■司会

私たちの町にあるムーブのご紹介をしました。どのようなセンターかお分かりいただけたかと思います。本日は北間さんにお越しいただいていますのでムーブの「ここがすごい」といった特色があればぜひ教えてください。

■北間

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ事業課長の北間と申します。先ほどお話がありましたように、ここ北九州市立男女共同参画センター・ムーブは、1995年の開所以来北九州市におけるジェンダー平等や女性のエンパワメントの推進に取り組んでいる施設です。

ムーブでは、女性のキャリアアップセミナーや、男性の家事育児参画を促す講座など、各種広報事業を通じて、男女共同参画社会の実現に向けた取り組みを進めているところです。そして市民の意識啓発だけでなく、ムーブを利用される市民の皆様へ、活動を通じて、立場を超えて交流し合い、活動のネットワークをさらに広げることができる場を提供しています。また双方向のコミュニケーションが取れる場としての取り組みを進めています。

そうした取り組みの一つとして、開所以来30年、開所月の7月にムーブと市民が一緒になって作る「ムーブフェスタ」というイベントを開催しています。こちらはムーブで一番大きなイベントです。ムーブフェスタは、ここムーブの存在と、ムーブが取り組むジェンダー平等や女性のエンパワメント推進に向けた活動について広く市民に知っていただくためのきっかけ作りの場として開催しており、今年は7月5日から7月26日まで約3週間にわたりムーブの主催事業の他、市民の皆様が企画された様々な事業、例えば講演会やワークショップ、コンサート、そしてフリーマーケットなど、多種多様な100を超える事業を行いました。

このように、北九州市立男女共同参画センター・ムーブは、市民の皆様と一緒に、北九州市のジェンダー平等や女性のエンパワメントの推進に向けて取り組んでいます。

■司会

北間さん、ありがとうございました。ムーブは市民が持つエンパワメントの発信の場である、ということがよく理解できました。

それでは、一人目のご登壇者をご紹介します。北九州市から、盗撮防犯ボランティアWc代表の山内千春様にご講演いただきます。ご講演いただく前に、まずは山内さんの活動がわかる日常を収めたビデオからご覧いただきたいと思います。

(山内さん紹介ビデオ)

北九州市	山内 千春 盗撮防犯ボランティアWc 代表
------	--------------------------

■山内

皆さんこんにちは。盗撮防犯ボランティアWcの山内千春です。今日は「盗撮をさせない社会へ。私の母から始まった小さな挑戦」をテーマにお話しします。母から受けた影響、過去の自分の価値観、そして今の使命についてお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

私はドッグエンタープライズ DOG SECURITY という企業のCSR活動として、盗撮防犯ボランティアWcを立ち上げました。現在は「盗



撮をさせない社会づくり防犯プロジェクト」の総称として We と呼んでいます。公共トイレや施設を中心に、点検パトロールや防犯教室などを行い、盗撮を未然に防ぐ活動をしています。

私は長崎県の離島にあります小値賀島で生まれ 19 年間過ごしました。小値賀島はとても海がきれいな島で海産物が有名です。夏には真っ黒になるまで一日中泳いでいたほど活発な少女時代を過ごしていました。高校卒業後、教員を目指すためにここ北九州市内でキャンパスライフを送り養護教諭の免許を取得しました。

初めて北九州へ来たときは、あっちにもこっちにもコンビニがあり、飲食店もカラオケ店もたくさんあり「ここは夢の国だなあ、都会だなあ」とワクワクして過ごしたのを覚えています。そんな田舎者の私が北九州へ出てきて早くも 20 年が経ちました。

盗撮をなくす活動をしているわけですが、私が大切にしているのは「防犯は特別な人だけのものではなく、誰もが日常の中で取り組める」という信念です。私の原点は母の存在です。母は行動力にあふれ、少し足が悪かった祖父に代わって家族を支えながら「よく女は愛嬌、ニコニコしていなさい」と話していました。

その言葉の奥には、笑顔で人と関わり前に進む母の強さがあるようでした。私はそんな背中から行動する力を学んだのだと思います。そんな母も先日 77 歳になりましたが現役の信用金庫職員としてバリバリと活動しています。

一方で私自身の婚姻時代を振り返ると「女性の幸せは結婚して出産し、家族を守って良い暮らしをすること」だと信じていました。子供が大きくなったら一緒にお酒を飲むことを楽しみに、日々を円滑にこなすことだけが自分の役割だと感じていました。

しかしその裏で、私という人間の価値や社会への貢献度に対して満たされていないと心の奥で感じていました。「私に何かできることがある。私にしかできないことがある。」そんな感覚がずっと残っていました。

そんな中で出会ったのが「見えない性暴力」と言われる盗撮という犯罪でした。小型カメラやスマートフォンの普及により、被害は増加の一途をたどっています。特に被害者の多くが女性や子供たちだという現実には強い衝撃を受けました。これは子供たちを取り巻く性被害リスクを高めている要因にもなっていると思っています。

その後 SNS で目にしたのは、盗撮の被害に遭った方々の切実な声でした。「外に出られない」「駅に行けない」「盗撮されているようで遊びにも行けない」「助けてほしい」といった切実なメッセージをたくさんいただきました。

それは日常を奪われ、自由を失った人たちの叫びの声でした。なぜ彼らがこんな苦しみを負わなければならないのか。なぜ施設管理者や社会全体がもっと早く手を差し伸べられないのか。盗撮を個人の問題だけにしてしまう現状に私は強い怒りと痛みを覚えました。

「被害者も加害者も、もう誰一人も出してはいけない。誰も取り残さない社会を安心して暮らせる日常と社会を必ず実現したい」と、その瞬間感じた事は今でも鮮明に覚えています。あれが私の活動の原点であり、使命だと感じた出来事でした。そして同時に「知れば防げる」という希望も感じたのです。

こう感じたことを理解してもらいたいと家族にこの話をしたのですが、パートナーからは強く反対さ

れました。「こんな活動をやって何になるんだ」「お金にならないだろう」と非常に強い反発を受け、孤独を感じているときもありました。

「どうしようかなあ、活動やめようかな」と思う瞬間もありましたが、私の中の使命感は消えず、活動を続けたいとずっと思っていました。「私の人生って何なんだろうと」このときから深く考えるようになりました。悩んだ末、私は離婚を決断しました。

シングルマザーとして新生活を始め、子育てと仕事、そして活動を両立させていきました。不安はありましたが、「やめる」という選択肢はやはりありませんでした。親として、代表としての覚悟をより一層感じた時期でした。

最初の活動は、本当に小さなものでした。公共トイレや施設の御手洗いを回り、盗撮の小型カメラがないかチェックしたり、街頭でチラシを配ったり、アンケートを取ったり、ステッカーを配布したりして、周りの人たちの意識を高める活動をしていきました。

そんな中で「ありがとう」と言われる言葉の重みと「誰もが安心して暮らせる未来を絶対作りたい」という思いは非常に強くなったのを覚えています。少しずつですが、活動の輪が広がっていき防犯講座やパトロール、大学や自治体との連携も始まりました。SNS やメディアを通じて、盗撮防犯の重要性を発信するようになりました。

他団体、他のボランティア団体や市内の大学生、学生ボランティアとも共同してパトロールを行ったり、シンポジウムを開催したりと周知活動に力を入れていきました。そうしていく中で、盗撮のない未来に希望を抱き「絶対に諦めない」という気持ちにもなりました。「点から線、線から面へ」という思いで、様々な人々と関わりを持ち、活動を広げていきました。

今では地域の町内会や学校、施設などで、ブースを用いた防犯教室なども行っています。日常の活動としては、私は一般的な会社で仕事をしています。仕事が終わった後に、こうした製品の打ち合わせをしたり、先ほど動画にもあったようなパトロールを駅構内や公共のトイレなどで行ったりしています。

最近では、メディアの方々も盗撮という問題に注目してくださるようになりましたので、こうした取材対応もしています。さらに企業向けの研修も実施し、盗撮による防犯意識を高めてもらう活動も行っています。また、パンフレットも様々な場所で置いてもらえるよう活動しています。

犯罪を未然に防ぐ新しい防犯の考え方、「盗撮はされてからでは遅い」と私は常々皆さんに伝えています。こうした犯罪を考えさせない教育、つまり「加害者を出さない教育」や啓発が必要だと考えています。また、犯罪機会を作らないこと。これは「被害者を出さない」ためにも、「加害者」、ひいては盗撮の加害者にならないような環境を整えていきましょう、という働きかけを私たちは様々な関係各所にお伝えしています。

さらに「Wc ガード」という機器の導入も推奨しています。こうしたものを施設や学校、様々な店舗などに導入していただくようお願いしつつ、環境整備を促すため各所へお声がけをさせていただいています。防犯には意識だけでなく、具体的な仕組みも必要だと考えています。例えば資料左下にある「Wc ガード」という防犯機器ですが、これを取り入れることで、見えなかった小型カメラのレンズなどを探しやすくなります。

この防犯機器での見え方を少しご説明します。目視で見たときは、左上の写真のように何も見えません。しかし、この機器を使って確認すると、真ん中の下の方のようになります。このように隠しカメラ

があるところがピカッと光りますので、レンズがあることを確認しやすくなっています。またこうした機器を設置することによって、犯罪の抑止になると考えていますので、様々な店舗さんに導入をお勧めしているところです。こうした技術を取り入れることで、安心が見える化し、犯罪抑止や防犯文化の定着につながると考え、私たちは日々訴え導入をお勧めしたり防犯教室を行ったりしています。

また活動が続ける中で私自身たくさんの気づきを得ることができました。最初にこの活動のきっかけとなった「知れば防げるのではないか」という思いがずっとあったのですが、この活動が続けていく中でこれが確信に変わったと感じています。講座を受けていただいた方々から「これなら自分でもできるよ」とか「本当に盗撮ってあるんですね、今日から私も防犯を心がけてみます」とか「教えてくれてありがとう」といった声を聞く中で、自分が伝え続けていくことは私の使命だし、役に立っているんだなと非常に貢献感に満ちた日々を過ごすことができます。

子供たちや女性からは、「安心して過ごせるようになった」という感想も寄せられています。先ほどのWcガードを導入してくださった施設などでは「導入後は、施設の安全性が高まった」とか「利用者が安心する」といった喜びの声も届くようになりました。そんな中で「防犯は怖さに備えるのではなく、安心を増やす行動だ」と私は改めて感じました。「伝え続けければ、誰かにちゃんと伝わっているんだな」と本当に強く実感できています。

この講演のお話を頂いたときに「活動の原点は何なのか教えてください」と言われましたが、自分の活動の原点は何だろうと考えたら、母の姿がすぐに思い浮かびました。私のために色々と動いてくれたり、地域のために寝る間も惜しんで活動をしつづけている姿を幼いながらも覚えています。それを思い出すたびに「自分はまだまだもっとやれるのではないか」と思い、自分を鼓舞する意味でも母の存在は非常に大きいと感じています。母の行動力や強さから学んだ「動く力」が、この活動に直結しており、私なりのエンパワメントなのではないかと思っています。母は非常に正義感の強く、悪いことは悪いと厳しく叱ってくれたこともあります。私も「正しいことは正しい」と言って、諦めずにやっていこうという気持ちを母から受け継ぎ、この活動をより一層深めていきたいと毎日思っています。

そして社会を守る使命としてその力を次の世代につなげていければと思っています。

本当に唯一無二の母に感謝しています。「できることを全力でやり切る」ことが育ててくれた母や家族への感謝の意味として表せるのではないかと思います。また、色々な人に支えられて生きてきた人生ですので、そうしたことにも感謝しつつ、活動を続けていきたいとより強く思いました。

今後の展望は「安心の文化を広げる」というキーワードで、盗撮対策の義務化の必要性を多くの人に知ってもらう活動を広げていきたいと思っています。

盗撮という見えない犯罪を許さない社会を作っていくため、教育、行政、地域と連携し、先ほどのWcガードの導入や、関係各所での防犯教室や点検パトロールを推進しながら防犯文化を社会に定着させ犯罪を抑止する取り組みを広げていきたいと思っています。

「知れば防げる」という私が最初に思ったこの言葉ですが、皆さんに講座を受けてもらった際に「これならできるね」とか「これなら盗撮ってなくせるかもしれませんね。頑張ってください」という声をよく聞きますので、皆さんもその意識を持っていただければと思っています。

「誰かのための、今日のこの一歩」として、この活動を全国に広げていきたいと思っています。防犯は特別な人のためではありません。自分のためだけでなく、お手洗いでしたらお手洗いをを使う次の人のためにもこの検査は役に立つと思っています。パトロールや点検だけでなく、盗撮というものを知ることによって自分のためだけでなく、誰かのための予防にもなると信じています。

自分のため、そして大切な誰かのためのその一歩は「利他の心」から生まれ、やがて社会全体を守ることに繋がるとしています。今日話をきっかけに、ぜひ「知れば防げる。安心は作れる」という言葉を心に留めてほしいと思います。

私の原点である母が、いつも笑顔で一歩踏み出していたように、自分も「自分のために、また誰かのために、新しい防犯の習慣をここから一緒に始めてほしい」と思い、今日は色々な話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

(司会)

山内さん、ありがとうございました。続いて二人目のご登壇者のご紹介です。築上町の男女共同参画ネットちく join! から亀野尾美紀さんです。最初に亀野尾さんの日常を映したビデオをご覧ください。後ご講演いただきます。

(亀野尾さん紹介ビデオ)

築上町	亀野尾 美紀 築上町男女共同参画ネット（ちく join'）
-----	----------------------------------

■亀野尾

皆さんこんにちは。福岡県築上郡築上町から参加させていただいています、築上町男女共同参画ネット(ちく join!) の代表を務めさせていただいています、亀野尾美紀と申します。よろしくお願いいたします。

今日私がテーマに挙げさせていただいたのは「小さな町から始まる女性のエンパワメントの波」です。私は先ほど申し上げたように築上町男女共同参画ネットの代表を務めさせていただいていますが、普段は動画でもご紹介させていただいたサロンの経営をしながら、講師活動、そして政治活動を行いながら3人の娘を育てています。

ちく join! は、年齢や性別にかかわらず、一人ひとりが個性を大切にしながら活躍できる地域づくりを目指し、活動している市民グループです。比較的若い30代40代の役員の人々と日々活動に励んでいます。築上町における男女共同参画という視点を広く捉え、築上町で自分らしく暮らすための学びや体験の場を作っています。



まずは私の原点と気づきについてですが、私はもう20年近く女性を対象としたサロンの経営をしています。その中で、女性の体を触り心と体の健やかさをサポートしてきたのですが、女性たちの多くの声に「諦め」や「女性だからこうしなければいけない」「母親だからこうでなければいけない」といっ

た、女性自身の思い込みや世間の風潮がまだ強くあることに気づきました。

日々疲れて、その疲れを癒すためにサロンにお越しいただくのですが、そういった言葉が次々と出てくる状況です。それをサロンで癒し、話を聞き、体もケアしながら笑顔で帰っていただくという仕事をさせていただいています。

ちく join！の活動を始めて6年目になるのですが、この活動に携わるようになって、特に感じたのが「これってサロンで癒すだけで女性の問題って解決できるのかな」という疑問でした。ここにまず気づきがありました。

私自身も子育てをしながら家事や仕事、また地域の活動に追われていて、それを一人で抱え込んでしまっているという現実がありました。しかし自分で「助けて」とはやはり言えなかったのです。

自分の中での思い込み、例えば「女だからやらなきゃ」「母親だからやらなきゃ」といった罪悪感が少なからずあり、何かそういった自分の経験も含めて「これってもう私だけの問題じゃないな」ということに気づいたきっかけがあります。

これは社会の問題だということにちく join！の活動を通じて様々な団体や人々との関わりの中で気づくことができました。

本当に何もわからず始まったちく join！の活動でしたが、福岡県内の様々な女性団体の方々との出会いや、学びの場をいただくことによって、たくさんの仲間が増えていきました。そんな中で本当に何もなかった私が「地域で活動したい」とか「声を上げなければいけない、変えたい」という思いが強くなってきたのを感じました。

元々政治に興味があったわけでもなく、自分が何かをするとは全く思っていなかったのですが、ただ「何かできないかな」という思いで活動を広げていくにつれ、関わる人が増え、自分の視座がどんどん広がり、高くなっていく感覚を強く持つようになりました。

そうすると、見えてくるものがどんどん増え、気になることが増えていき「これはこのままにしておいては駄目だ、子供たちにこのまま残すわけにはいかない」という思いがすごく強くなり「何か行動を、アクションをしたい」と変化していきました。

そして私は「選挙チャレンジする」という大きな覚悟を決めました。今年の3月に福岡県議会の議決選挙が私の地域で行われることが決まり、私の中で「広く声を上げる」ことにチャレンジしたいと思い、本当に覚悟が必要でしたが腹をくくってチャレンジをすることを決めて行動に移すことにしました。

政治団体を立ち上げて、政治活動をしていく運びになるのですが、そうして活動をしていく中で、早速言われたことがありました。それが「子供はどうしてるの？」ということでした。あるいは初めてお会いした方とかに「噂に聞いたんだけどネグレクトなんでしょ？」と直接言われたりしたこともありました。

動画で見ていただいた通り、私は3人の子供を一人で育てており、決して放っているわけではなく両親の協力のもと自分の活動をしています。しかし「ネグレクトなんでしょ」ということを、平気で言われました。それ以前にも私は講師活動などで色々な地域に出張してお話させていただく機会をいただくと「子供がどうしてるの？誰が見てくれているの？」と言われます。当時は主人がいましたが「旦那が

見てくれてます」と言うと、「いい旦那さんやね」とか「羨ましい」と言われました。

しかし、心と思いました。「男性ならこんなふうには言われないんだろうな」と。男性が出張に行っても「子供どうしてるの？奥さん見てくれてるの？」とか多分言われないんですよね。やはり女性が子どもを見るのが当たり前。子供は女が見るのが当たり前という社会なんだなあと思いました。これは「アンコンシャスバイアス」という無意識の思い込みの部分なんだろうな、というふうに思いました。

そして年齢的なものでも、私も今45になったのでそんなに若くもないんですけど「まだ早いんじゃない？」と言われたんですね。「まだ早い」って誰が決めるの？と感じました。あなたにとって早くても、私にとっては早いとは思わなかったのですが、そうした事も経験しました。

これらが示すのは、男性の候補者だったらこういうふうには言われないんだろうなという社会の無意識の偏見でした。それでも行動を辞めず、挑戦し続けた理由というのが、やはり娘たちに自分が行動する姿を見せたかったからです。

「声を上げるということを恐れずにやっていいんだよ」という背中を見せたかったというのが、すごく大きな理由としてあります。誰かが決めたからとか、人に言われるからとかではなく、自分で声を上げて行動するということを最後までやり続けたいというのが、私の中の行動するエネルギーとして強くありました。

特に私が住んでいる福岡県築上郡というところは、人口1万6000人ほどの小さな町です。現状として日本の女性議員の比率というのは世界に比べると非常に低い水準にあります。築上町においてはゼロというのが現状です。

築上町だけでなく築上郡も同様で、京築地域の数字を足してもまだ全然足りません。人口の半分以上が女性なのに意思決定の場に女性が少ないというのは、非常に残念です。この数字を少しでも上げる必要がある、上げていこうと思うきっかけになりました。

ただ地方で活動するというのは非常に高いハードルがある、ということを私の体験から感じています。女性がそうした活動するときに、家庭だったり、育児だったり、育児が終わったと思ったら今度は介護だったり、それぞれ両立していくことが非常に大変だというのは実際感じました。

私は両親が今元気で、近くにいてくれるので、全面的にサポートを受けながら活動することができていますが、やはりそうではない方にとっては、この両立が物理的にすごく難しいと感じています。これは伝統的で性別的な役割分担が根強く、女性が家のことや子育てをしていくのが当たり前という風潮がまだまだ残っています。

そして政治活動においてはネットワーク不足が問題としてあります。日常生活をしていると政治に関わる人や、地域の活動してる人たちとの関わりが不足してしまいます。お勤めされてると特にそうです。

私は振り切って自分でアクションを起こしているので、いまネットワークを少しずつ繋いでいけています。たださっき言ったように女性で政治活動されてる方は本当に少なく、ロールモデルが不足しています。これらの理由から地域で活動することの厳しさを感じています。こんな環境だからこそ小さな1歩の積み重ねによって大きな変化を生み出せると強く感じています。

どんな未来を子供たちに渡していけるのかな、とよく考えます。子供たちが性別とか環境に関わらず公平に学び、チャレンジできる未来。女性が経済的に自立できて、働き方を選択しやすい未来。また一

一人一人の声が尊重されて、意思決定にしっかり関われる未来。そんな場所をこれからも広げていきたいな、と思っています。

子供たちが自分の可能性を信じて行動して、政治は遠いものではなく自分事だと思えるように、社会にどんどん参画して行って欲しいです。そうして未来のリーダーを育てていくきっかけになったらいいな、と思っています。

本日は女性のエンパワメントを広げる、というテーマで話をさせていただいてるのですが、仲間と繋がるっていうところをまず始めに意識しました。ちょっとしたお茶会を開いて、自分がやりたいことを声に上げると言える仲間が最初に必要です。

声を上げること気づいてもらうことができます。そして気づくことから意識というものは始まっています。意識するといろんなアンテナに情報が引っかかってくるようになるのです。

私も学んで気がついたからこそ意識するようになって、いろんな現状や情報が自分のアンテナに入ってくるようになって、「これどうなの?」とか「これおかしくない?」「これ違うよね」ということに、気づけるようになりました。またその気づいたことを、仲間と繋がることで共有したり、一緒に学んだり、チャレンジしたりということを通して、みんなで成長するという過程を進めています。

その小さな1歩が周りを巻き込んだムーブメント起こしています。一緒に活動した女性たちが、違う場所で積極的に活動されてるのを見ると、繋がってよかったな、とか応援したいなっていうふうに思えます。

このような形で地域の女性の声を集めようと小さなお茶会とか、SNSでの発信などで対話を始めてみました。その中で出てきた課題をみんなで共有して、どういうふうに取り組んでいけるか、ちょっとしたワークショップみたいな感じでまとめて、みんなで話し合ったりしています。

このように、みんなで繋がることで活動する一人一人が「自分がロールモデルになるんだ」という思いを持って活動してほしい、と伝えています。私はたまたまきっかけがあって、覚悟を決めて動き出したことによって、いろんな仲間が増えてきています。

ですからこうやって動き出すということが、私の中では一番大きな転機になったと思います。

今日から、このときから始められる一歩があると思っています。この1歩が明日の大きな変化に繋がるとしています。誰かが動くのを待つのではなくて、自分から動き始めることを意識して活動をしています。

まとめになりますが、私がこの活動を通して感じたのは、声を上げることの大切さです。黙っておくことはできるのです。私も声を上げないで済むならそっちの方が楽だし、別にこのまま過ごすことはできるのです。しかし声を上げたことで私の周りから少しずつ少しずつ、うねりができているのを体感しています。

私が声を上げることによって共感する声が聞こえてきました。「亀野尾さんが言ってくれて本当にうれしかった」とか「私もそう思ってたんだよ」とか「応援させて」とか「あなたの言葉で子供が政治に関心を持ってくれた」という声をたくさんいただくことができました。

自分がアクションを起こすことによって身近なところから変えることができる、ということを感じられましたし、私の活動が次の世代、またさらに次の世代の若い女性たちにバトンを渡すことができるの

ではないかと思っています。

さきほど山内さんのお話の中にもありましたが、やはり原点はお母さんだという話を聞いて、うちの娘たちも、私がこうやって活動することによって「お母さんさんみたいに何か私もしたい」と思ってもらえるような、そんな背中を見せていきたいなと思います。

いま子どもたちから「諦める」という言葉がよく聞こえてきます。長女は高校生ですが例えば学校の中の先生と子供たちの会議とかで、何を言っても声が届かないといいます。

自分たちの言ったことは反映されないし、生徒総会ももうシナリオが決まってて私たちが何言ってもだめなんだ、ということ言うわけです。「それでも言い続けたいの？」って言ったら「いや、もう面倒くさいから」というように諦めてるのです。

大人に対しての諦めの言葉が子供から聞こえてくる。そうではなく声を上げる、あげ続ける、そして伝えることの大切さや、諦めなくていい社会を子供たちと一緒に作っていかねば、と思っています。

今の自分の行動が未来の子供や女性たちを、明るく照らすものになれば嬉しいと思っていますし、今日私がこのイベントに出るということも勇気が要る1つの行動なんですけど、この私の覚悟を決めた行動が、今日見てくださってる皆様のエンパワメントの何かきっかけになると嬉しいなと思っています。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

■司会

亀野尾さんどうもありがとうございました。それではここからの時間は質疑応答となります。

まずは議員の方からのご質問です。それぞれの最初の一步の大変さについてお聞かせいただければなと思います。お一人ずつお聞かせください。

■山内

そうですね。今までずっと気持ちの中では、何かしたい、何かこう社会に貢献できることをしたいという思いはありましたが、なかなかそういう機会がないっていうところにジレンマや、もやもやした気持ちがありました。

今の活動に繋がる出会いがあったときに、子どもたちに私が何かをやっている姿を見せるチャンスじゃないのかなと思い一歩を踏み出しました。ただ最初は盗撮という分野を正直あまり知りませんでした。

きっかけをくださったのは、ドッグエンタープライズという企業なのですが、そこが調査会社ということで、盗撮っていうのは多いんだよという話を聞いたときに、自分が全然知らない世界に生きてると思いましたし、そこから一歩加えて、もっと知りたいなという気持ちになりました。

盗撮という分野は、当時ネットで探してもあまり出てきませんでした。水面下で行われる犯罪なので潜在化しやすいのだと思います。自分で掘り下げて勉強していくしか大変でした。またドッグエンタープライズで調査の現場を見たり、調査を依頼してきた方たちの声を聞いたりする中で、もっと勉強し

ていかなきゃいけない、プロとしてやっていかなきゃいけないという意識を持つようになりました。もう一つ私が一歩を踏み出すのに大きかったのは、子供のために自分の姿を見せたいという思いでした。

■司会

ありがとうございます。亀野尾さんはどうでしょう。

■亀野尾

ちく join! の活動を始めた当時は深く考えてなく、何か楽しそうっていう感じでした。当時メンバーは30代、40代だったのですが、60代、70代の役員の方達の仕事を引き継ぐというスタートである意味それも最初の一步でした。そして結構軽やかにスタートしました。

ただ始まってみると思っていたのと違う。もちろん時間も取られるし、活動をしていく大変さがありました。メンバーはみんな子育て真っ只中で保育園や小学生を抱えるお母さんたちばかりでした。

先ほど30代の人間をまとめるのって大変じゃないですか?という話がありましたが本当に最初の頃は、どうやってこの活動を続けていくのか、できる人ができることをしようということでやっていた。

続けていくのさえ難しいと感じた時期もありましたが、できないことをできないまままで終わらせなかったのが、うちのメンバーだったと感じています。

できるようにするにはどうしたらいいだろう、ということをもみんなで話し合ったり、引き継いだ先輩方にご意見をもらったり、温かく見守ってくださりました。今日も見てくださってると思います。

行政の方たちともしっかりと手を組んで活動させていただいてるので、今はできないことはできる方たちをお願いをしています。今のところ揉めることもなく6年目を迎えることができています。

一方で当時は、まさか私が政治の世界に足を踏み出すなんて考えていませんでした。ただ踏み出してみると、これまでとは違った景色を見ることができました。いろんな勉強をさせてもらって視点が増えて、それを楽しく感じながら活動させてもらっています。

■司会

お2人とも、どうもどうもありがとうございました。お2人のお話だけでなく、持ってる雰囲気や、柔和さ、そして、しなやかな強さというのを周りの方は感じてるんじゃないかな、と思いました。

そして今日は女性のエンパワメントというテーマでお送りしていますが、それはポジティブに前に転がり続けるようなことではないか、とお二人の話を聞いて思いました。

もう一つの質問です。心が折れたときとか、もやもやするとか、ネガティブになりそうなときの、お2人の対処方法をお聞きしてもいいですか。まずは山内さんからお願いします。

■山内

本当にこの活動を始めたときは、もやもやすることばかりでした。特に結婚していたときは、本当に家に帰ってきてても誰も私にお疲れ様って言うてくれない。「お前が勝手にやっているのだから」みたいな感じで、誰にも賛同を得られてないような感じとか、家だけじゃなくて、こういう活動始めていろんな人に話をするときに、変人扱いじゃないですけど、ちょっと1歩引かれる感覚で私のこと見ているんだろうなっていう思いがありました。

すごく悔しいというか「どうしたらわかってくれるかなあ」と思ってたんですけど、やり続けた先の結果が私の努力の成果じゃないかと思い、先ばかりを見て、目の前のモヤモヤを払拭してきました。

盗撮という問題はセンシティブで、周りの人から驚かれることも多いです。ただ「絶対に盗撮をなくす未来が、対策をする未来が必ず近くに来ているんだ」と信じて揺るがない気持ちを持ち続けることで、何を言われても「うん、はいはい」と聞き流すというか「この活動を応援しなくていいけど、見守っという気持ちで、モヤモヤした気持ちを自分なりに解消してきました。

あとは賛同してくれる方たちの声をしっかり聞いていると、もっと活動を広げていきたいなと思いますし、被害者の声を聞いていると、自分のこのモヤモヤはすごく小さいことだなとも感じます。

あとは、私は食べるのも好きですし、みんなでワイワイするのも好きなので、もうイヤ！という時はおいしいものを食べて、お酒を飲んで自分なりに思いきりリフレッシュして、明日からまた頑張ろうという気持ちになります。

■司会

山内さんありがとうございます。おいしいものを食べるというのは参加者の皆さまからも共感の声が上がっていました。それでは亀野尾さんはいかがでしょう。

■亀野尾

もう私も大体もう食べて飲んで寝てます。特に政治活動を始めたときが一番、周りから言われました。「あんた どうしたんね」みたいな。こっちの方言で言うと、「どげんしたんね、何事かね」みたいな感じで、言われることも多かったです。

自分のチャレンジに対して否定的に言われることもありました。多分昔の私だったらその言葉に一喜一憂して「やっぱりだめなんだ」となってたかもしれません。今でこそ周りの友達に相談して、励まされながらメンタルが鍛えられて、本当に傷つきにくくなったし、落ち込みにくくなりました。

多分山内さんもそうだと思うのですが、いろんな言葉を全部ポジティブに受け止めるようになりました。さっきのお話にも出てきたのですが、私の中で一番ショッキングだったのがネグレクトと言われたことでした。

「こんなに子供たちと関わって生活してるのに、1人で3人育ててるのに、ほったらかしもしないのにネグレクトって言われるんだ」と思って、その時はさすがに「え？」って思ったのですが、その噂は本当に一瞬で終わりました。なぜかという周りの友達が、そういう話を聞いても一瞬で否定してくれるんです。

そうすると、だんだんとそうやって話に出してくれるとネガティブな噂であっても、私のことが話題に上がり、名前が出る事に「あたしの話をしてくれてありがとうございます。その時間私のこと考えてくれてたんですね、ありがとうございます」と言っていたら、ショックな気持ちはなくなっていきました。だんだん落ち込むという事がすごく少なくなっていきました。

はねのけるでもなく、もう攻撃すらもしなやかにするすると、くぐり抜けるようにこなれてきている自分に気づくことができました。

■司会

お2人のお話は、女性も男性もすごく参考になったのではないかと思います。特に今はSNSなどで

ネガティブな声も聞こえやすくなっています。ネガティブなことばかり聞いていると落ち込むというのも、すごくよくわかります。

でもお2人のお話を聞いて思ったのは、お二人とも100あるネガティブの中で1でも応援してるよといったポジティブな言葉を見つけるのが上手いということです。そんなポジティブな言葉を信じて自分の力にしている、というところが2人の強さに繋がる秘訣だと思いました。

あとそれからお二人は、お子様がいらっしゃるということで、次に何かつなげたいとか、次の子供たちに安心して暮らせるとか、すごく次のことを考えていたところがありました。

これはもちろん例えばお子さんがいらっしゃらない人も、もっと若いシングルとか、歳が上の方にとっても「若者が住みやすいようにとか、何か次のことを考える」という事は同じなのですが、特にお二人は目の前の子供たちの未来を見据えた行動を起こされている事が印象的でした。

最後の質問ですが、まだご自身の活動は前に進めていかれますが、次へのバトンをどう考えているいますか？どのようにつながって欲しいと思いますか？これはお二人のチャレンジや事業のビジョンにもなるかと思いますが教えてください。

■山内

そうですね。ビジョンというか最初この活動始めるきっかけは子供たちです。正直子供たちからも、お母さん何もできないって小さい時は思われていたと思います。子供たちが大きくなったときに、お母さん何もできないで誰かにしてもらってばかりと思われるのもどうかと思っていたので、子供たちに、私でもできるし、やろうと思えばできるんだよっていう姿を、私がしっかり見せていきたいという思いがあったのでこの活動を始めて今に至っています。こういう私の諦めない姿勢をみてもらいたくて、子供たちにもやろうと思ったことに対する正義感や信念は大事にしてもらいたいという思いがあります。

しかし今の活動の中では、私1人だけで全国を変えていくことはとても難しいです。いろんな人たちの力が必要だと思います。例えば今は私が検査パトロールをするというスタイルですが、例えば清掃の方とかにもレクチャーをして、清掃しながらカメラがないかとか、異物はないかという点検をしてもらえるようになればいいなと思います。また講座や、育成もやっていきたいなと思います。多くの人に盗撮という分野を知ってもらい、防犯意識を高めて盗撮の危険性を知っていただく事で、一人ひとりを繋いで私の分身が増えていけばと思います。そうすれば隅々まで防犯、盗撮に関する意識を高めることができるのかなと思います。

後継者については、一人一人がこの話を聞いたことで、一人一人が後継者になっていってくれるとうれしいと思います。

この活動でなくても「私も何かしたいなあ、社会に何か貢献できることはないかな」と少しでも思う事があれば、いつから始めても遅くないと思います。私自身も何もできないと思ってましたが、殻を破って今は自分を信じてやっていけています。それが自分の強みにもなっていますので本当に誰でもできる事だと思います。後継者はそんな形で繋いで広がっていけばいいなと思っています。

■司会

ありがとうございます。誰かを後継者に指名するのではなく盗撮の危険性や防犯のための知識を一つ学ぶことが、もうそれが後継というか、次につながっているんですね。

自分が知ることや小さな気づきや習慣が安心や安全につながって、自分が知ったことが次につながるという、素敵なお話しでした。では続いては亀野さんですね。

■亀野尾

私たちのちく join’ 自体は、一人一人が年齢とか性別にかかわらず、個性を大事にしながら、地域で、生活できるように活動をしてるのですが、そもそもこれを掲げて活動しないといけないこと自体が私は問題だと思っています。

ただ今は訴えていかないといけない現状があります。今は女性も仕事をしないと生活が成り立たない家庭も増えてきている中で、女性が社会に出れば大変なことも増えているという現状を知った上で、子供たちには今私が感じてるような生きづらさや苦しさを持ち越したくないです。

だから今わかってる課題を私たちが解決して、子供たちに気持ちよくバトンを渡してあげたいです。お母さんたちがやってくれたから今こうやって私たちは伸び伸び自分の個性を存分に発揮して生活できてる、と感じてほしいです。

現に今の私がこのように生活できてるのは昔の人たちが、そこに気づいてくださって何とかうまくいくように導いてくださったから今に至ってるのです。私も同じように、未来にバトンをうまく引き継げるようにしたいです。私たちが、今困ってることを言わないと解決できないので声を上げようと思います。そして声上げたらこうやってみんなで解決できるんだよというのを、若い人や子供達に見せたいです。きっと先にまた違った課題が出てくると思うので、私も上の人から引き継いだ解決へのパターンが、引き継げればいいなと思います。

■司会

お2人の前向きになるお話を聞いて、私たちもできる事はあるかも？とワクワクする気持ちになりました。ありがとうございました。

あとは皆さまからのコメントをご紹介します。今日は東京や海外のからも参加されていますので、海外の方からのコメントを紹介します。「日本の男性のもつ固定的価値観が女性のエンパワメントの低さに関連してると思います。日本の男性は、女性が強く意見を述べることに困惑しているのでは？」というコメントでした。

このコメントには今までに出た子供や次世代への後継というお二人のお話を少し広げて、女性だけでなく男性のエンパワメントはどうだろう？という視点で考えていきたいと思います。

こうした伝統的な価値観は日本の男性だけではなく世界でも同じです。また男性だけでなく女性も固定的価値観に縛られていることもあります。

お二人は精力的に活動されていますし、その中でももちろん男女問わずみんなで理解しあってすすめているのかと思いますが、お二人の活動の中で固定的価値観を感じた事や反対に男性がいたからこそ前に進めたことなどはありますか？

■山内

さきほど私の母の話をしましたが、母は団塊の世代で「女性はこうであるべき」という意識を植え付けられて人生を歩んできて、そんな中でも自分の立ち位置を一生懸命見つけてきたと思います。仕事しながら男性社会で揉まれながらも一生懸命仕事をしてきたといつも私に話していました。私自身は男性

だから女性だからとあまり意識したことはないですが、少し価値観のずれというか、何でそういう言い方をするのか？といった心無い言い方をする方もいます。ただ今は男性だから、女性だからという事より、私の考えを受け入れて、前向きな意見をくださって、私を一人の人間として話を聞いてくれる男性も多いです。

私自身の活動のことや環境をよく理解して、サポートしてくれる人が私の周りには多いです。性別を超えて一人の人間として会話や対話ができ、お互いに助け合おうとか寄り添いあえるといいなと思います。

■司会

非常に山内さんにうまくまとめていただきました。男性とか女性ではなく、私という1人の人間を認めてあげる。そしてそれぞれの一人の私という単位をお互いが認め合うことが一番大事な点ですね。

亀野尾さんには特に政治やかかわる地域の中で、特に固定的価値観を感じていらっしゃるのかもしれませんが。そうしたご経験も含めた現状や周りの男性の状況を教えてください。

■亀野尾

おっしゃる通りで政治の道にも進み始めているので自分の経験で感じたのが、決して女性の味方は女性だけではないという事も感じました。私をサポートしてくださってる方は男性も多いので、本当に今は男だから女だからというのは少しずつ変わってきています。

ただ田舎においては、事務所にお客様が来たら女性がお茶を出すという風習はありましたが、うちは男女問わずみんなで行っています。理解してくれるのはうちの父も同じです。

こうした状況の変化について思ったのは、自分が変わったからではないかとも思っています。自分が女性だからこれをしなきゃ、みたいに勝手に自分で決めていたように思います。自分は女性だからという考えをなくして、一人ひとりの為の行動や発言をするようになったときにすごく周りから理解してもらえるようになりました。自分の意識が変わった気がしました。結局「男だから女だから」というのは自分発信だったのかな、とも思っています。

■司会

ありがとうございます。またとても素敵なことを亀野尾さんから教わりました。確かにそうなんですね。自分の中の価値観や考えを少し変えてみることで、周りが見えて、周りとの関わり方も変わってくるというお話は私も気づきがありました。

今日はお二人のお話を聞いて、エンパワメントって、何か積極的で前向きであるという話だけではないことも気づきました。お二人のお話は、私という一人の個性をうまく出して、それがいろんな地域や人々を巻き込んでいることを特に気がつかされました。

2日間にわたり開催した「エンパワメント！誰が？どうやって？」でしたが、皆様からたくさんのキーワードをいただきました。

この2日間の登壇者は、ごく普通の人である一人の人間として、日々生活する中で考え、なんとかしなきゃと思って声を上げて1歩進んでいました。これは誰でもこれ持っている力なんですね。性別や年齢や住んでいる場所などに関わらず、どんな人でもできることなんですね。

そして「エンパワメントという力は1人では大きくなっていけない」ので家族や友人、あとは組織

の支えなどもありましたね。今日のお話しにもありましたが、1人の気づきや頑張りというのは、まずは一人の点から始まって、繋がって線になっていっていました。1日目のSEWAの話もありました「指が拳になるには時間がかかる、拳がより強く、より大きくなるにはさらに時間がかかる」という創設者エラ・バットさんの言葉もありました。

それから「エンパワメントというのは尊厳を取り戻すことだ」というコメントもありましたが、本当にこれは一人一人の価値や、私たちの生きていくことでもあるのだと学びました。

皆さま自身も「エンパワメント！誰が？どうやって？」という問いかけに対する答えを見つけることはできたでしょうか？本日はありがとうございました。

2回目 終わり